



土方巽の舞踏における「危機」の実践と思想

岡元, ひかる

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2022-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8241号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008241>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



暗黒舞踏を創始した土方巽は、戦後の日本に急速に浸透した近代的状況への向き合い方を、踊りの方法として模索した人物である。土方は1974年に舞踏グループ「白桃房」を結成し、その後の二年間で16の新作を弟子たちに振り付けた。土方独自の踊りの手法は、この時期の振付活動を通じて確立された。

土方の手法は、人間のあり方が平準化・固定化されてゆく傾向に対する批判的態度に根差している。例えばバレエやスペイン舞踊の動きを「飼い慣らされた動作」と揶揄した彼は、踊り手がある規範を内面化し、同じ動作を繰り返し練習する西欧由来のアプローチから離れようとした。その試みは、ある唯一の理想に同化しようとする野心に駆り立てられ、その目標に向かって邁進し続ける、際限のないプロセスから踊り手を解放することでもある。

これまでの土方研究は、主に脱領域化、脱秩序化を目指す土方像に光を当ててきた。とくに現代思想家ジル・ドゥルーズによる「生成変化（devenir）」論と、舞踏の親和性の高さが指摘される場合、両者は秩序から逃れ続ける流動性の思想と実践として注目される。

土方の稽古では、人間に限定されない動物、植物、絵画のなかの人物、自然現象や物質などのあらゆる他者が設定され、それらを夥しい数の言葉に換えて土方が弟子たちへ投げかけた。弟子たちにはそれらを身体で模倣するのではなしに、「なる」ことが求められる（三上1993）。模倣とは土方が避けようとした代理表象（representation）のシステムによる実践だが、ドゥルーズの生成変化論でもまたこの代理表象が退けられる。他者を典型的な特徴に還元し、無限に細やかに分割されうる差異を一つの表象として再現前させようとする模倣は、土方にとってもドゥルーズにとっても忌避すべき近代性なのである。さらに土方が雑誌に寄稿したテキストや、相手の理解を常に拒むような語りによる対談やインタビュー記録からも、同様の態度が指摘されている。土方の舞踏はこうして、ドゥルーズのとくに生氣論的性格と密に関連するものとして捉えられてきた。

ただし、舞踏家は常に身体として存在し、また土方の舞踏は現実の舞台の上で遂行されたという事実不改めて注目するなら、彼らが純粋に流動的な存在であり続けることが事実上不可能であることに目を向けねばならない。本研究は、かつて白桃房に参加した土方の直弟子たちが開く稽古の参与観察と、彼らへのインタビュー調査を行っ

た。それによって明らかとなったのは、彼らが土方から学んだやり方で踊る際、ある内的時間意識の限界が体験されることである。常に今・この現実にも身を置く踊り手は、土方が次々と設定する理念的他者に、自己を完全一致させることはできない。

土方の弟子たちは、この限界体験においてこそ、平準化や固定化に抵抗することができる。そもそも脱秩序化の運動は即自的に成り立たず、逸脱を行うための足場となる秩序を必要とする。そのため彼らは、秩序化と脱秩序の両方に必然的に関わることとなる。より正確に言えば、この秩序は必然であるばかりか、無数の他者を設定し、さらに動きの順序を緻密に構成した土方によって、積極的に準備されたものだとは本研究は考える。なぜなら、彼らの近代批判が成功するのは、秩序と脱秩序の狭間に生じる緊張そのものが、踊りの中で迫り上がってくる場合においてだからである。

土方の近代批判の要諦であるこの緊張は、具体的に実践化され、また土方のテキストの中では様々な表現によって言語化されている。それは彼が70年代から晩年に至るまでこだわった「危機」の実践と思想である。生前の土方は、インタビューや対談のなかで、しばしば彼が「危機を要請する」ことを追求してきたと発言していた。彼が舞踏によって積極的に「要請」したのは、非現実的な他者に「なろう」とする努力によって、かえって踊り手が有限な存在である現実が、逆照射される事態である。

以上を論じる上で、本論文の第一章では、ドゥルーズと、彼の協働者であったフェリックス・ガタリが提案した「器官なき身体」の概念に着目し、それを秩序と脱秩序の狭間の領域として解釈した（以下、二人に言及する場合は「ドゥルーズ＝ガタリ」と表記する）。ドゥルーズ＝ガタリの器官なき身体は、精神分析の理論的枠組みであるオイディプス三角形に対抗する「離接的総合」のアイディアによって特徴づけられる。離接的総合が表すのは、異質な複数の存在の違いが保たれながらも、それらが全て同じものに帰するというパラドクスである。このパラドクスは系譜の喩えに適応された。彼らが、器官なき身体とは大人、子供、母親の「厳密な同時性」であると描写したように（ドゥルーズ＝ガタリ『千のプラトー』）、それは、本来なら時間的な前と後ろに振り分けられるはずの複数の出来事が、同時に起きうる可能性を表してもいいのだ。異なる複数の出来事を、同時に内包する基盤として構想されたのが器官なき身体であり、それは存在の複数と同一性の狭間の緊張それ自体を表す。

続く第二章と第三章では、器官なき身体がもつ以上のようなパラドキシカルな構造が、土方の弟子たちの時間意識にも見出されることを明らかにした。

第二章では、一瞬ごとの動きが生成されるプロセスに注目した。土方の稽古では、言葉で示された状況が、現実には起きているのだと信じ込み、自分自身を騙すような「騙されやすい注意力」が弟子に要求される（土方『遊びのレトリック』）。ある状

況を想像する弟子は、その内容を虚構のイメージ「として」対象化せず、無媒介的に受け止めねばならない。言われたことをそのまま現実として受け止める、ある意味きわめて従順なこの態度は、秩序への抵抗法としてドゥルーズが提案した「フモールの手法」と共鳴する。それは、理念的な手本にいつまでも到達しえない模倣の行為とは異なっていた。

弟子たちは、自分自身であるイメージを想像しておきながら、そのイメージされた「背中に小人が走る」、「皮膚に虫が這う」などの状況（三上 前掲書）によって思わず身体が反応してしまう受動性を体现せねばならない。そのため彼らは主体としてのアイデンティティと客体としてのアイデンティティが、同時に私に帰するというパラドクスを成立させる努力を行う。ドゥルーズがフモールの手法を論じながら描き出したパラドクスは、こうした弟子たちの時間意識を説明し得る。

第三章では、生成された動きと動きをつなげて一連の振付を遂行する、よりマクロな踊りのレベルに注目した。ここでは土方が創作した『楼閣に翼』（1978）に出演した弟子が70年代当時、異なる三種類の振付を、同時に踊ろうと心がけていたことに注目した。その際、弟子はそれぞれ独立した振付の違いを保持したまま、しかしそれらを同じ一つの瞬間のなかで踊ろうとする。それは個々の振付を順番に遂行するのではなく、複数の異なる私に同時に「なる」というパラドクスを実現させる努力である。

またそれは自己のあり方を更新し続けるべく、意識をどんどんと未来へ進めてゆくアプローチとは異なる。作品上演を念頭におきながら稽古に取り組んでいた弟子たちは、決められた数と種類の振付を踊らねばならなかった。そのためには有限の振付をすぐには使い切らないで、かつ自己のあり方を唯一の枠に回収しない道が必要となる。こうした事情に即した形で、弟子は過去と未来を、現在に内包しようとするのである。

動きの生成というレベルにおいても、また動き同士の接続のレベルにおいても、弟子たちは、複数化された自己の中のどの唯一の自分にもなりきれない、中途半端な未決定状態を生きようとする。そのためには過去から現在へ、現在から未来へ進んでゆく時間の直進的な流れをどこまでも展開させてゆくのではなく、時間の前進に抵抗し、今・ここに留まろうとする努力が要請される。自分の身元を宙吊り状態にしておくこのアプローチには、脱秩序化の運動だけでなく、その運動に淀みをもたらし、無限のプロセスに歯止めがかかる事態が必要なのだ。そしてこの事態は、存在の複数性と同一性がせめぎ合う「危機」によって特徴づけられる。

第四章では、この「危機」がさらに、より具体的な立ち姿としての実体を与えられていたことを、土方の発言や、先行研究と筆者が作成した稽古の参与観察記録をもと

に論じた。土方は自分自身を、今にも複数に引き裂かれんばかりの激しい緊張が生じる「さけめ」として描いていた。この舞踏家の存在論と関連づけられた「がに股」をめぐる彼のアイディアは、稽古のなかでは具体的な身体操作として弟子たちに伝授されていた。それは、足元に力を入れずに軽く膝を曲げ、なるべく足の接地面を小さくするため、自分自身を上から吊るような感覚によって導かれる立ち方である。土方の弟子たちは、自分のアイデンティティをすぐには確定しない優柔不断な態度を、このような立ち姿として、文字通りの仕方で呈示してみせているのだ。

知らずのうちに内面化された近代的な規範は、透明な権力として生の営みをドライブする。土方の舞踏は、その流れにのって効率よく未来へ進むことに対し、自己を複数化する方法を対抗させるものである。そして土方や彼の弟子たちの身体は、近代批判というモチーフを表象するものではなかった。ちょうど彼の「騙されやすい注意力」と同じように、彼らは近代への批判をダイレクトに現実に適応させていたのである。

本論文では以上の結論を述べた後、補章を設けた。晩年の土方は、ドゥルーズ＝ガタリの器官なき身体とは距離をとった、新たな「危機」の思想を展開し始めていた。こちらの「危機」は、複数のアイデンティティの狭間で今にも分裂せんとする受苦的な様相を帯びたものではなく、むしろ脆くデリケートなイメージによって描かれたものである。この新たな「危機」の思想は本研究の理論的射程に収まらないが、第四章までに論じた「危機」の延長上にある思想だと考えられる。そのため補章では、この動向の全体像を、土方の発言録や公演に関わる資料、また先行研究による参与観察記録などを整理しながら考察した。